

旭川の

ふだんぎ

作る方に廻れ、書く方に廻れ、出す(出版する)方に廻れ

— 橋本 義夫 —



「人魚」 佐藤 忠良 作 1967 風のギャラリー 彫刻の森(北海道療育園)

みんな
万人が文を書き
みんな
万人が本を出す

ふだん記旭川グループ 74

「後藤功さんは何処いずこに！」

—旭川東高等学校校道遥歌作曲者—
後藤功さん謎の生涯

宝塚市

松原勝美

ここに二枚の古びた写真がある。その内の一枚は、旭川東高の応援団旗を背にして、団員を従えて立った団長姿の「後藤功」。(以下人名敬称略)。

一見すると団長然とした猛者らしいイカツイ風貌の彼が、もう一枚には、どこかに憂いを含んだようにも見える表情をして、知的な風貌をし、端然とした姿で写っている学生服姿の写真、何れもまご



うかたなき「後藤功」の姿である。この写真を頂いた彼と同期（東高二期生）でもあり、筆者の東高先輩の「舟橋テイ子」(註1)夫人の言によると、猛者というよりは、文学好きでナイーブな印象を抱かせる人柄であったと言う。

このような二面性、言い換えれば文武両道、の証として、「武」の方では、柔道をやっていたとの伝えもあり、「文」の方では、昭和二十五年九月一日(彼が高校一年生時)発行の東高文芸誌「炎」創刊号に寄稿された詩と短歌を見ても明らかであり、その一文を紹介しよう。

詩・悔恨

後藤 功

限りなき 嫌悪の念が

吾が胸に あふれいづる

はかなさと わづらはしさが

吾が胸に とゞめおかれる

すぎしこと みな後悔し

吾はまた 悲しく嘆く

短歌

後藤 功

まさごなす数なき星に思ひ出の
涙ながして春はあけゆく

平凡に生きる人こそ本當の
さひはひとと吾は思えど

扱て、彼「後藤功」の経歴に付いて調べていたが、その出生、旭川時代の生家住所、家族構成など、切れ切れ



の情報しか得られず途方に暮れていたが、彼の一歳上の姉「博子」の存在が分かり、令和二年八月、二度に涉り書簡を差し上げていたが、宛先人不在で戻っても来ず、誰かが受取っていたことは確信していたが、結果として連絡が付かずどうしたものかと、思いあぐねっていた矢先、今年三月、彼女の長男「稲葉鋭」《注2》から「母の遺品を整理していたら貴方の手紙が出てきた」との突然の連絡があり、聞けば彼女は、手紙を出した丁度その一年前（令和元年八月）逝去されたとの由、今回のことは、彼女の導きがあったからこそ、と思われるほどの幸運に見舞われたのであった。

「功」と「鋭」は叔父・甥の関係になる訳だが、両者の生年を比較すると、「功」は推定昭和八年生まれ、「鋭」は昭和三十三年生まれと両者間に二十五年の開きがある。この年齢差は親子程のそれであり、話題の共通性に乏しかったのでは、と想像する。聞けばやはり両家の親戚付き合いは、それ程濃密ではなく、情報の不足、不確かさがあるため、筆者の想像を交えての展開になること必定、お許しを願いたい。

先ず「功」の生家「後藤家」の家族構成を見ると（年長順）、

父 「弥三郎」：職業軍人、第七師団下士官？、支那

事变南京開城戦で戦死。その他経歴不詳。

母「千代」：旧姓入江、五十五歳で亡くなったらしい。経歴不詳。

長女「幸子」：大正十五年十月十日生まれ、昭和二十三年旭川師範学校卒、昭和四十六年、上川管内初の女性校長となる。昭和五十八年六月没。

長男「巖」：昭和五年生まれ、旭川中学卒、四十二年生、その後の経歴不詳。

次女「博子」：昭和七年十月三日生まれ、昭和二十六年旭川東高卒、同校一期生、その後藤女子短大卒、現姓稲葉。

そして次男「功」の六人家族だったとのこと。元々「後藤家」の出身は群馬県前橋市の出で、武士の礼法で有名な「小笠原礼法北海道宗家」（現滝川市にあった）を名乗っていたとのことでもあり、子供の教育にも厳格な気風を残していたらしく、特にこの姉妹は、後年の「功」大学進学に関しては、旧帝大への進学を熱望していたようである。それに反して、本人は文学で身を立てようと思っていたらしく、北大に合格していたにも拘わらず、「国学院大学」への進学を主張し、結局は自分の意見を通し同大学へ進学したようである。

母「千代」は女手一つで育て上げたことから、私立の大学ではなく国立大学へ進学させたかったようである。「功」本人は「穏やかな性格で、母の血を受けた両姉が、早く亡くなった母の替わりに厳しく接していたようです」と前出「稲葉鋭」は語っている。

また「千代」は、情操教育にも熱心で、映画やコンサート、展覧会などに子供達を良く連れて行ったようでも語っている。このことは「功」は具体的に何処で作曲の技法を身につけたのかは分からぬが、彼の音楽的素養が培われた要因の一つかとも思われる。

そして当の「功」本人のことであるが、現在、経歴の一部しか分からないが、昭和三十一年大学卒業後暫くしての、昭和十五年～五十六年に掛けて、神奈川県川崎市役所の「財政局税務部市民課特別徴収第四係長」の名刺が手元に残されており、在職確認が出来ている。

確かなことは唯一このことのみであり、甥の「稲葉鋭」の言を借りると、「川崎高校」の英語教師を勤めていたとの伝えもあり、経歴は定かで無い。

そのような中で衝撃的な話として、時期は不明であるが、恐らく二十代後半だろうとのことであるが、車に「ひき逃げ」され、その後遺症の頭蓋骨変形と頭痛に悩まされていたとのこと、恐らく晩年は不運にも糖尿病が

悪化したようで、死因はそのことによるものであろうとのことである。(没年不詳)。事故後に献身的に介抱してくれた女性と結婚したが、両姉の反対にあい、長女を授かったが、その後離婚、現在は親子共々の安否、居所などは不明であるという。

「功」にとつての後半生は決して、恵まれたものではなく、むしろ不遇な人生であつたと言つて良いほどの波瀾に富んだものと思えるが、「逍遙歌」を作曲し、多くの後輩に希望とロマンを与えたことにより、彼の心魂は満たされたものと思えるならば、その意味では、安んじられた一生であつたものと確信して止まない。

最後に、彼の一生に想いを馳せ、ゆくゆくは調査の進捗を期待し、彼の人となりを詳らかにし、後々の人々に伝えられんことを希望して止まない。願わくば、東高逍遙歌が生徒の「心の灯」として歌い継がれんことを望みながら筆を置く。

脚注

〔注1〕「舟橋テイ子」、旧姓板垣、旭川東高二期生、後藤功親友、故「舟橋貞男」夫人、北海道上川郡上川町在住。後藤功写真、情報提供して頂いた。

〔注2〕「稲葉 鋭」、後藤功の甥、稲葉博士の長男、昭和三十三年八月十七日旭川で生まれる。昭和六十二年信州大学医学部卒業、現在横浜市都筑区で「いなば耳鼻咽喉科」開院。

謝辞

今回の調査・情報蒐集に際し、旭川東高同期生、「菊地勝昭」さんの暖かい後援ご協力に対し、深く感謝申し上げます。

令和三年五月十日記す。



記録は一時の出来事を永遠なものにする事が出来る。記録は世の片隅の出来事を、全体のものにする事が出来る。記録は、名もなき人の行為を、人類に結びつけることも出来る。記録のみが、消えゆくものを不死なものにする事が出来る。

橋本義夫短言集より